小田原史談
第69号
発行所　小田原史談会
小田原市西栢山3310

小田原城障子堀並びに畝堀考

難波　明

一、はじめに

元来小田原地方に於ては文献史学面のみ発達し歴史地理学的考察研究は殆んどといって良い程なされていない。

城郭の研究に於ては文献も大事ではあるが、現地と文献上の差異が非常に違っている事が屢々見られる。それは城という性質上止むを得ない事である。小田原北条氏の城郭に就いては敗軍の城の常として余り残らないという事も事実である又大久保氏の居城としての小田原城に就いては、徳川幕府の軍事政治上最も大事な拠点の一つに位置しておった関係上城主としては大久保氏であっても城そのものは幕府のものであった。これは天災后の城復旧工事の財政的援助のいくつかの事実に於て判明するものである。此の様な内情に依りまして、小田原城の内容は秘密の部に属している所が比較的多いために大日本土木史の明治以前の部を見ましても他の城に於ては精細なる城図が記載されているのが多い中に当城のみは僅かに絵図が表記されているのみで実測図等は全然望む事はできません。現在小田原には城図なるものが大別して二十数枚保有されておりますが、本研究会の会員の長年の研究の結果、これは要約すると三種のみである事が判明し、又此の中で比較的信憑性のあるものは二種類であるが、これもどこまでも絵図であって細部に就いては定見のあるものでない事を考察するものである。

二、堀の種類

今回問題になりました障子堀に就いて、本研究会としても広義の堀障子は天守閣裏側水堀だけとは説明しておりません。他にもあることは研究項目の中に入っており、十数年前より確認致しており、ここに一般的文献をあげて論述する。

堀には大別すると、水堀空堀の二種類あり、水堀は水運の利があり、空堀は城に最も多く用いられる堀で水がなく、底部も道として利用する事ができる。又此の中間に泥田堀等、それぞれの用途により普請が違うのである。又山城に於ては尾根を断ち切るために「堀切」なるものがある。

中世に於ては、空堀は水堀に比べて堅固であるとされていた。又関西の城は石垣と水濠即ち現今見られる一般の人が城と思っている普請が安土城を始点として早くより行なわれていた。

関東に於ては、その地形・地質・気象の関係上特に関東ロームという独特の土質の関係上土塁、空堀が用いられ特に小田原北条氏の築城に於て、この特徴を最大限に利用し、西の安土、東の小田原と東西の二大普請といわれている。（普請とは築城学上、土木工事のことをいう）

以上の様な発展は戦国の世という特殊な時代のために、どこまでも実戦的に築城されたためで、徳川氏が天下を統一するや、元和元年（一六一五）一国一城令を発して諸国の城をことごとく破却せしめ、各大名一国につき一城のみ許され、又城の質も実戦的より領民に対する威令を重んずるようになっていったのである

三、障子堀と畝堀

本題としての障子堀、畝堀の名が一般的に有名になったのは北条流兵法学の祖北条氏長の著である「師鑑抄」に依ってである。此の「師鑑抄」の中に畝堀とは堀の底に所々田の畦のように土を掘り残してある堀をいう、一種の「堀障子」のある堀であると説いて、水堀の場合には忍の者の水底通行を妨げ、敵兵の集団的な行動を妨げ、急速な行進を阻止する事が出来るのであるといっている。

又江戸期に於ては、有名なる軍学者山鹿素行の「武教全書」（全八巻）の中で堀障子とは堀の中に所々に田の境の畦のように、十文字に高い所を残しておく仕掛をいうのであるというような説明をしてあり、後に又十文字堀ともいわれている。以上二つが中央に於ける障子堀、畝堀の説である

四、障子堀の伝承

次に小田原地方の文献により説明してみる。「相中雑志」という本があり「智仁、勇」に分かれている。著者は三浦義方で大久保家臣、通称寛作、号を玄斉という。

△天明元年九月四日生、安政三年五月六日歿、行年七十六歳　墓は誓願寺に在り。▽

本書智の項に「御堀御天守裡に続き障子堀杯とて、なだたる溜有り。常をし鳥住」

仁、勇の項に「障子堀鍛冶曲輪ホト石の東通りの空堀を云ふ」。

昭和三年四月二十九日、武蔵野会は幹事長文学博士鳥居龍蔵以下関東地方切っての郷土史研究会として、小田原城の研究に来原され会員浦辺仙橋先生がこの見学所感を機関誌「武蔵野」昭和三年七月一日発行に載せられている。その一端を紹介すると

「堀には水堀、空堀の二種がありますが、何れが良いと云う訳はありません。従来は堀巾の余り広いのは良くありませんでした。十間か、十五間が最上で水が沢山有るのも悪い。底が泥で潜行出来ないのがよい。底の作り様も種々あって、薬研、片薬等は普通ですが障子と云うのがあります。これは本来水の流出を防ぐのが目的ですが、水中を潜って城に近付けないためです。旧天守裏の堀がそうである事を尾崎（亮司）氏から承りましたが、大久保氏用意の程がうかがわれます山城内部に水を貯へること

は防禦のためよりは飲用水又は消化用ですから水堀と云っても一概に論ぜられません」。

これを分析すると

第一、障子堀は常時水が貯えられ、堀の中の構造が外側より見てもわからないようになっている。その証明として天守の裏側の国安道路上より障子堀はのぞき易いために水がいつもなければならぬ。「相中雑志」智にあるように水鳥が住む状態である。次に「相中雑志」仁勇にある堀、即ち旧小田中の所にある堀は空堀と明記してある。これは畝堀のために常時は水を貯くわえる事がないためで又天主裏の障子堀の如くこの堀をどこからも高い所から窺く事が不可能なるために堀の中の構造を知られる事がない。又地形上、地質上常時水を入れておくことは堀自体が破壊される事を意味している。どこまでも籠城最后の時に飲用水としての時に水を貯える使命の堀である。

第二に畝堀と障子堀との差異であるが、畝堀は障子堀の如く「十文字」に土が残されず僅かに縦一列に土が残るだけで、堀巾の狭い山城にみられるもので、現天守閣裏の如き平山城のやや平地部のような地形にある巾広き堀とは異なる。そのために畝堀の事を武田堀障子堀の事を北条堀といわれる。最初は武田家山城の経験上畝堀が出来、次に北条氏がこの利点を採用し、しかも小田原に多い湿地を多分に活用し広く大きな水堀にしたものを北条氏長は障子堀と名付け、山鹿素行はこれを総称して堀障子といったものと思はれます。

本研究会としても長年北条氏の空堀、水堀を歴史地理学的に又現在地に即して詳細に検討した結果、空堀の重要部分には有事の場合には水を導入したとの各種の有力なる材料を発見しており、これに就いては他日近々に発表する予定です。ただし地質上前述した通り関東ロームの特質上、丘上の空堀に常時水を入れ、水堀としておく事は無理のようで、即ち堀に水を入れておくと土塁に水が吸引され土質が重く軟弱となり崩壊し堀としての価値が全くなくなるのである。又畝堀にしても堀中の土橋も水分をふくみ自然に崩れ堀中に水を貯えるという畝堀の存在目的がなくなるので空堀としておく事が常識のようである。

第三として障子堀は本研究会に於ても当初は大久保氏時代の堀を想定致したが前記の如き文書以外に昨年秋、静岡県三島市山中に在る「山中古城」を三島市教委に依って手入れをされたので直ちに調査研究に及んだ所、小田原城と同じく空堀は作られ特に後北条氏独特の築城工事である段違空堀、喰違い空堀が見受けられ、二重堀となる。又山中城本丸とその直後にある北条山との間に畝堀がはっきり見られる。この畝堀を見るに、普段は水は堀底を湿す程度にあるのみで、一朝事ある時に始めて水が充分入れられる。この水は籠城時の飲用水と見受けられるこの水はどこまでも雨水と僅かばかり流入する地下水によって満たされるのである。

第四に、天守閣裏障子堀は現在の大堀より雷曲輪（現二宮神社）を巡り、天守閣裏の二重段違堀へと広がり用米曲輪の方へ廻るのである。二重段違堀の箇所は他の堀よりも巾広く、浅く広がり、石垣は用いず、土塁と空堀に細工して水を導入した関東独特の堀を形成し、しかも堀巾が広いために堀の内に井桁形の土橋を作り、この頭すれすれまで水を入れ北条氏独特の障子堀を作成したのである。

あとがき

故滝口伊将氏は有信会員として又市役所郷土文化館主事として小田原城の生字引的存在の人で、故人がわれわれに説明した所では、旧小田中（現小田高）の校庭にある堀と天守閣裏の堀は小田原自慢の堀であり、然かも同じように小田原城として最も大事な所に造られ構造はそれぞれ異り、武田堀、北条堀と云われておったと。

又昨年歿故された峯堅雅大僧正は、北条氏康公四百年祭の時に、私は関東大震災のときに小田原女学校の校長をしておったが、小田原中学の所にあった堀を堀障子、天守裏にあるのを障子堀、同じようであるが内容が違うから良く覚えておいていただきたい……と。

最後に資料の提供調査に多大の便宜を与えられた小田原城天守閣山口貢氏、郷土文化館三津木国輝氏、市立図書館川添孟氏、日本大学山内昭二氏、伊礼正男氏その他小田原城郭研究会員諸氏等多くの方々の御厚意に対し御礼を申しあげる。

参考文献

大瀬伸、鳥羽正男『日本城郭史』
新編相模風土記
相中雑志
鳥羽正男『近世城郭の研究・城郭と文化・城郭の歴史』
日本歴史地理学会『地理と歴史』第三十八巻第五号
神奈川県郷土研究会『郷土神奈川』第一巻第一号
武蔵野会編『武蔵野』第十二巻第一号
杉山博校訂『小田原衆所領役帳』
相模国大意
渡辺外記兵法書
片岡日記
甲陽軍鑑
北条氏長『北條流兵法書』
山鹿素行『武教全書』

（小田原城郭研究会長）

桜と私

神保栄

市川博様の祖父は泰蔵様と云いました。明治四十三年の大雨で剣沢が流れました。当時村長で有りましたので砂防工事を行い保安林にされました。

また、耕地整理組合を設けて光海の深田を耕地整理をし千代の小学校から光海神社まで。又法輪寺、城前寺、東光院に桜を植えて下さいました郷里の先覚者の一人でありました。

この桜の満開な時、城前寺で句会を催しました。泰蔵様は俳句の先生で泰岳堂と云はれました。

文合庵機外宗匠を招いての句会でした。土地の句の同好者も集まりました。曽我八景も題が出ました、泰岳堂様は青嵐籠をころがすお塔坂と云われました。機外宗匠はすべっても転んでも山桜かなと作られました。

泰蔵様の植えられた桜は戦時中横済の山元町の小学生に薪炭の配給がありませんので、この桜を村民に伐って貰いましたところ、あっと云う間に宗我神社前迄の間の多くの桜はなくなって仕まいました。

私は所用あり千代小学校門を通った時、校門の桜老いけり五十年と一句思わず口から出ました。

中井町（中村郷上ノ中村）史跡巡り

竹見竜雄

一、中村郷に就いて

歴史上の記載はきわめて古く、平安初期の和名類聚抄に見える外、それより古く今から一千二百四十年程以前の天平七年（七三五）の奈良正倉院御物「相模国封戸祖交易帳」に、餘綾郡中村郷云々とあり、郷内の一里（凡そ五〇戸）が、聖武天皇の皇后であの有名な光明皇后の食封（じきふ）の地であったことが記してある。その後いつの頃か人口も増えたので郷を二分されて、この中井町辺を上ノ中村又は「かみや」と称され、市内橘地区は下ノ中村「しもや」と唱えられた。

二、宇塔坂と滝ノ前の五輪塔、み堂跡

小田原方面からの大山道は、前川向原の不動様に「従是大山道」と角石に刻み、その上に不動明王を載せた所謂大山道から入るのであるが、北田の大山道一里塚から長い坂道となるので長坂、又の名を宇塔坂と称すがそこに五輪三基がある。地名にもなっているように由緒ある故人の墓であろう。凡らく豪族中村氏末期のものではなかろうか。又中村氏第一次居館跡、殿ノ窪北方滝ノ前には大きな五輪塔二基がある。滝ノ前と称する中村氏一族の室か側室のものではあるまいか次に五所八幡宮前方一帯を「み堂」と呼んでいる。中村氏が堂宇を建立した所であろう。その東側山の根、北田から藤沢に通ずる道下に大きな土台石、或は五輪塔等が数個散在している。

三、上ノ中村総鎮守五所八幡宮

豪族中村庄司平ノ宗平は一族を挙げて源頼朝の源家再興に尽したことは有名である。その後中村氏は雑色の「子ノ神権現」を、源家の守護神八幡宮に改めて現在地に祀り、中村郷上ノ中村総鎮守にしたという。源頼朝全国六十一願所の一つで、いろ〳〵な社宝の外に本願平ノ朝臣景貞（中村氏末流か）等記載の文明十三年（一四八一）再建の棟札或は今次大戦に供出をまぬかれた寛永六年鋳造、小田原大工田島又右ェ門等刻名の神鐘（みかね）等がある又昔は六月晦日、今の町役場前方耕地を大町（おゝまち）というが、こゝに豪族中村氏がこの五所八幡を惣社となし、領内の小八幡、赤田、篠窪、堀の四八幡を神幸せしめて盛大な「みそぎ祭」を執行した。五所ノ宮の社名はこれから出ている。この五社神幸も江戸の初期頃より次第にその影を消し始めたとのことであるが、その折神前に海山の幸所謂七十五膳を供する折に奉納した「鷺の舞」は県下に於いては五月五日の国府祭とこの祭（四月二十九日）だけである。永田博士のお話では鷺は天日則ち日照、竜は雨乞、鬼は悪魔退散で古い農民の祈願の神楽舞とのことである。尚この祭に引き出される豪華な屋台四は実は鉾（ほこ）で京都祇園祭りを模したものであろう。

四、中井町の古墳について

町内境には大塚の地名や鬼塚があり、中村小学校々庭には前方後円墳？が、その後方には倍塚二基が、又旧校舎裏及び岩井戸等には横穴古墳群がある。

五、公所加藤家のマリヤ観音像

公所（ぐそ）とは室町の頃の地方下司役所までを政所（まんどころ）と称したが、その所在が地名となり各所に同名の地がある。加藤家は前記五所八幡文明十三年の棟札に、政所加藤五郎右ェ門と記載の旧家である。マリヤ観音はキリスト禁制の世に、かくれ信者が代官に没収されて加藤家に保管せしめたという。但し一説にはキリスト教には関係なく崇拝なされたという話もある。

六、藤沢銭鋳銭座跡

徳川幕府は中期に至って通宝が不足をきたしたので元文（一七三七）の頃各所で寛永通宝を追鋳せしめたが、その一つに藤沢銭がある。故石野瑛先生は藤沢市及びその周辺一帯を隅なく調査なされたが、その型蹟が見当らず、終にこの藤沢に着目なされた。而かし鉄の残滓（かなくそ）のみ出土したのではと、外の先生方から余り重要視されなかった。その後、私は町の有志の応援を得て調査に調査を重ね、成川氏宅にフイゴの神を祀った跡と、同氏宅から銅壺を発掘して確証を得た。その為最近古銭研究家もその著書に、藤沢銭鋳銭座跡は中井町と記す様になった。小川浩著「寛永通宝銭譜」にも中井町と記し銅は玄倉より搬入、受負人（請の誤か）須藤平蔵（鴨沢須藤家？）とある。

七、境は和名抄の桜井郷か

斉境（いわさか）？

境部落の中央に桜井権現という小祠があるので和名抄記載の上ノ郡桜井郷との説がある。而かしその頃の一郷は三里が標準、一里は凡そ五十戸、一戸は一まきの言葉の如く、家の子郎党全部を指した。この観点から推すと地域的に問題がある。一方境の隣が岩倉＝磐座（いわくら）太古我々の祖先が大きな石を建て、神の寄り座としたその地名であり、その畧内を斉庭（ゆにわ）又は斉境と称した。境はその後段の意ではなかろうか。

八、境の曲渕氏と曲渕山玄宗寺

徳川家康は武田氏滅亡後その残党を多く家臣とした武田には主君の為ならその馬前に死すという武士が多かった為である。この曲渕氏、後に記す雑色の曲渕氏井ノ口の米倉氏皆その類である。曲渕助之亟吉清は家康より境の地を与えられ、筑後吉清と称し二代は吉重三代吉明とこゝに住し後江戸に出て旗本に列したという。菩提寺玄宗寺は三代吉明の建立で、歴代の位牌を安置している。

九、県指定天然記念物槐（えんじゅ）大樹

前記五所八幡の元宮、子ノ権現にある。樹齢凡そ八百有余年と伝え、目通り九・三米、樹高一六・二米、昭和三十二年私が調査して県に報告した処、早速県の天然記念物の指定となった。口碑によれば保元二年（一一五七）叡山の僧義円行脚の砌り、杖を挿したのが活着今のこの大樹であるという。堀江先生のお話では原産地は支那大陸で樹齢の長い木であるとのことである。

十、曾我兄弟の従者鬼王段三郎の墓と雑色家百足丸

建久四年夏五月、曾我兄弟仇討本懐後、その従者であった、松原鬼王丸、富田

段三郎はこの地に余生を終ったと伝え、鴨沢に両氏の墓がある。その墓守り広沢家に鬼王丸の陣太刀一振りがあったが、故あって唯今の雑色家である城明院建国寺に納めた。百足丸の名は小田原藩主が、刃の乱れがあたかも百足に似ていると名命なされたという。尚雑色家は昔修験者、今もその衣服等が残っている。

十一、雑色の曲渕氏と良屋山玄張寺

武田の家臣曲渕勝左ヱ門吉景も家康の家来となりこの地に住した。吉景四男七左ヱ門吉資は父吉景の領之内三百石を与えられて分家した。その後吉資には男子がなく、旗本下津八右ヱ門正行の男勘左ヱ門正重を養子となし、その子十左ヱ門正吉は武蔵国で四百石の知行を受け出府旗本に列した而かし吉景の三男迄は詳でない。菩提寺玄張寺は二代吉資の建立で四代正吉迄の墓がある。寺内の慶長十二年建立供養塔に曲渕十助とあるが不詳である。

十二、鴨沢城跡

明応四年（一四九五）二月十六日（九月説もある）伊勢新九郎長氏（後の早雲）は、小田原城主大森藤頼を追い払った。藤頼は岡崎城の三浦道寸義同（よしあつ）をたよったので、両軍はこの中村川をさし挟んで対陣すること実に十七ケ年に及び、終に岡崎城は永正九年落城した。この砦は三浦方の山城である。寺山の旧家古文書にこの戦で武和泉守が戦死をし、その子息に道寸や上杉定政が感状を与えたとある。山上には今もその頃の戦跡を残している。

十三、鴨沢須藤家の小田原城の門扉

明治の始め小田原城解体の折買い求めたという。須藤家この地の山林地主である。

十四、簑笠明神の准后道興の歌碑

旧井ノ口村の鎮守、簑笠とは雨乞の意であろう。戦国乱世の頃、京の聖護院の修験者、准后道興は諸国を巡って、回国雑記という紀行文を著わしこ、その中に「簑笠の社とて社頭ましましける暫く法施し待ちて、天が下守らんための誓とやこゝにし宿る簑笠の杜」とある。境内にその歌碑がある。

十五、古戦場五十塚六十塚

この中村郷は至る処に古戦場がある。中にも応永二十三年の上杉禅秀の乱にはこゝの豪族中村氏は亡んでいるし、前記明応四年の長氏対道寸の対陣も久しかった。井ノ口から金目方面に通じる峠に表記の地名があり数多くの塚があったが、戦中戦後の食糧難の為入殖者が無惨にも一つ残らず開畑、唯今はその影もない。

十六、米倉丹後守と井ノ口宝山米倉寺

米倉井氏は武田氏の出、甲州は八代郡米倉郷に住したのでその在名を称した。武田氏は信玄没後勝頼は天正三年（一五七五）三河長篠城の奥平信政を攻めたが織田、徳川の連合軍の鉄砲隊に優秀なる家臣悉くを失した。米倉重純もこゝに戦死をした。その後同十年正月勝頼は連合軍に追いつめられて天目山に亡んだ。米倉重純の子種継はその後徳川家康に認められて家臣となり、真田附近にあったが後この井ノ口附近の領主となり、その長子清継の代に武州金沢に移り、その子昌純、孫昌尹（ただ）の代には一万五千石の大名に列した。

この井ノ口村には清純の弟繁次、その子権平（つぐひら?）と住し、後金沢に移ったという。菩提寺米倉寺裏一帯を丸という。陣屋の跡である。寺後に種継、繁次、権平の墓があり寺宝に位牌や米倉氏下賜の品々がある。

尚この寺は本堂、庫裡共中村郷の禅寺として代表的な建築物である。又井ノ口の地名はアイヌ語、涯の所との説（岐阜が元井ノ口）があるが村の東方からは清水が湧出している。

十七、春日ノ局宿泊の大島家

徳川三代将軍家光公養育係り春日ノ局が大山参詣の砌り一泊と伝え、長屋門はその折新築という。局は小田原藩主として三代勤め後越後高田に国替えとなった稲葉氏の出、入生田長興山招待寺稲葉氏墓所にも局の墓がある。

前記大山道は宇塔坂から井ノ口、曽屋一名十日市場（現秦野市）で二つに分岐表参道には寺山、伊織ノ台大滝。又裏参道は簑毛、下社。昔は簑毛にも御師数戸があり、今も石の大きな定夜灯がある。

十八、井ノ口近藤家

米倉丹後守家臣近藤九兵ヱは、主君と共にこゝに参り、後米倉一族金沢に移っても尚この地に留まった。屋敷裏に練武場跡や甲州より馬で運んだという、一族及同僚戦死者の五輪塔、宝筐印塔、層塔等大小二十八基、中には赤星博士の南北朝期に逆上る仏像を刻ったものもある。

尚家宝に甲州武河城見取図、九尺槍、天正十九年検地帳等がある。尚現在の主家は凡そ三百年位以前の建物である。又この辺を馬場と称し外に大的等の地名も井ノ口にある。（来春中井町史跡巡り御参加の方はこの会報御持参下さい）

〈古代の相模〉を探る
著者をたずねて

秦野市在住の中村さんが、このたび相模の国府と国分寺の所在について、未知の部分を自ら探求され、従来とは違った一説を立て、その集大成を江湖に送る。

敬老の日、曽屋台の自宅を訪問、乳牛六頭と四〇アール余の畑を耕作、御子息は平塚市役所勤務の由、ごくあたり前の兼業農家である。「家族を初め、みなさんの温かい理解があったればこそ、この書を出版できたのであり、この書が研究の士の御参考に供し得るよう願ってやみません」。

中村兵吉著「相模の国府と国分寺の変遷」
秦野市曽屋五六二〇
（電）〇四六三―八一―六〇七二
（H）

懐古（秋深む）　広沢十五夜

箱根路の湯坂のつゞらのぼりきて
十六夜日記をあらためて読む
兄弟を供養する碑の並ぶ上を
すれすれに飛ぶ秋の蝶一とつ
赤沢の山に遠矢の遺踏をば
訪ね来たりて涙にくれぬ
足柄の山に月冴ゆる夜秘曲をば
護らんと笙を吹きたるあとも